

主な意見等の整理（第4回）

（育みたい資質・能力）

- 資質・能力を視点とする教育は重要なポイントであるが、相変わらずコンテンツベースの活動がもてはやされている状況であり、保護者・社会に対しても国としてしっかりメッセージを発信する必要がある。保護者への啓発が進むと保育者自身の資質・能力を育む実践力も高度化していくのではないか。
- 日本の幼児教育においても資質・能力という言葉キーワードとして使っていく、気運を高めていくということになるのではないか。
- 資質・能力で示せば、活動を縛ることにはならない。また、同じ遊びの中でも、子供によっても育まれている資質・能力は、子供の興味・関心によって異なる。
- 資質・能力を明確に設定して明示することは細分化に向かうのではないかというリスクがある一方で、より明確な資質・能力の育成に向かうということに加えて、より横断的でホリスティックな子供の姿を生み出す可能性や、より意図的、計画的、組織的な営みによって生まれる可能性があるのではないか。
- 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿や5歳児から小1までの過程において資質・能力が一定程度クリアになることは、小学校以降のカリキュラム、小・中・高等学校の入り口がクリアになることにもつながるため、幼児期だけではなく、小学校以降を視野にいれていくことが重要。
- 接続期のカリキュラムや指導計画の作成につなげるためには、3要領・指針等において、これらに関する文言がもう少し加わるとよいのではないか。
- 資質・能力の明示化や整理は、資質・能力の育成を多面的に確かにしていこうという動きである一方、分析的になりすぎてしまうとまずい。ダイナミックに個人の有能さを評価していくことが必要。
- 子供はもともと有能な存在で、有能な学び手である。コンピテンシーを育成するのではなく、もともと持っている有能さを顕在化させる、洗練させるという表現のほうがよいのではないか。
- 3要領・指針や小学校以降の学習指導要領が基づいていく子供観や学力観、指導観を明示していくことが重要である。
- 資質・能力の考え方だけでなく、環境を通して行う教育という方法論を小学校と共有し、つながりを持たせていくことが重要。

- 小学校で環境でうまく学べない子供がいた場合に、教師が個別指導をするのではなく、環境を再整備する、子供による再構成を含め環境をやり直すということができたらよい。
- 乳幼児は進んで環境に働きかけ、環境との相互作用を通して学び育つということがとても重要。環境の人・もの・ことと効果的に関わろうとする生得的な動機づけのエネルギーが失われつつあり、遊び出せない子供、遊べない子供、人と関わらない子供について危機感を有している。

(幼児理解に基づいた評価)

- 幼児教育において育みたい資質・能力が整理され明示されていくことは重要である。それと同時に、明示されればされるほど、これを育てればいい、その視点からできた・できないということにつながりかねないため、環境を通して行う教育であることや発達にふさわしい学び方、評価の在り方を明確にすることが必要。
- 資質・能力を重視していくには、評価の在り方についてセットで議論をすることが必要。例えば、毎日の保育の中で子供について語り合うリフレクションを丁寧に行うことが重要。こんなことができない、あんなことができないというのではなく、子供について発見したことを話し合うことが重要な評価活動である。小学校も同じで、点数ではなく、子供たちの行動や素振り、言動から子供たちの中に何が芽生えているのか、それを可視化して、リフレクションしていくことが重要ではないか。
- 評価は、できた・できないではなく、子供がどう心を動かして何をどう考えたのか、そのプロセスの見取りそのもののはずであり、それに合わせて授業を再構成していくことが求められる。

(時代の変化に応じた保育方法の在り方等)

- 人口減少地域の異年齢保育や小集団の保育が広がっていくことが予想されることや母国語が日本語でない子供や医療的ケア児等への対応など、課題が多様化、複雑化する中で、年齢の横割りでのクラス構成というのが今後も望ましいのか検討が必要。
- 国立の附属幼稚園が中心となって研究を行い、市町村の公立幼稚園等がその研究成果を活用して実践を行って地域の幼児教育の質の向上を図っていくというように、公立幼稚園やこども園が研究開発の一翼を担っていけるとよい。